

17. 当院における上部消化管出血に対する内視鏡的止血術の成績と検討

秋山 修宏・酒井 一也(信楽園病院内科)
新国 恵也・清水 武昭(同 外科)

当院で昭和58年1月から60年12月までの3年間で、上部消化管出血の為に内視鏡的止血術を行った症例のうち検討可能な症例39例についての成績と傾向を発表した。止血成功例は28例(71.8%)であった。合併症を有する症例は28例(71.8%)であり、そのうち重症例は20例(51.3%)であった。重症例での止血成績は65%であり合併症を有さない症例と同率であり、合併症の有無が止血成績に影響するとは言えなかった。多臓器不全症例では止血成績は不良であった。潰瘍の数、露出血管のタイプと止血成績との間には一定の傾向はなかったが、大きく深いと感じた潰瘍の止血成績は不良で大きさと深さが止血成績に影響するのではないかと考えられた。

18. GIFQ₁₀ による十二指腸球部内反転法の試み

何 汝朝・五十嵐健太郎(新潟市民病院)
月岡 恵・佐藤 明(消化器科)
木村 明

過去6カ月間に上部消化管内視鏡検査のため来院した患者を at random に GIFQ₁₀ によるルーチンの胃及び十二指腸を観察後、球内反転を試みた。男性29例、女性17例。年齢は16才から72才。結果：46例中、反転成功は24例(52%)、不成功は22例(48%)であった。不成功例の原因検討では球部が小さいため13例、胃レ線上“牛角胃”が4例。これらの内視鏡の共通点は、球部が狭く、浅いため、アングルが掛けられないためと思われた。胃下垂5例、これはスコープを押し込むむさい、長さが不足のためと思われた。合併症は認めなかった。症例提示として、十二指腸球部癌 症例を供覧し、本法による内視鏡下摘出に成功した。以上少数例ではあるがGIFQ₁₀ による球内反転は思っていた程悪くないという印象を受けた。

19. CF で発見し、右腸骨々髄炎による回腸瘻と考えたが、手術的に終末回腸憩室穿孔による盲腸周囲膿瘍であった1例

登坂 尚志・松浦 徳雄(巻町国民保険病院)
阿部 三郎・今井勝十郎(同 外科)
田中 稲実(同 整形外科)

症例は77才、男。約2ヶ月続く水様下痢と、7ヶ月間に10kgの体重減少で、大腸ファイバーを施行した。大腸には異常を認めなかったが、終末回腸に瘻孔(?)を認め、経口回盲部造影でも、回盲弁直前に小指頭大のニッ

シュを認め、ここよりバリウムが管腔外に漏出し、15年以上続いている右腸骨々髄炎の部と一致していたので、この為の回腸瘻と考えた。患者の希望もあり、回盲部切除を行なった。回盲弁直前の後壁に、小指が通る位の瘻孔を認め、右腸骨窩の癒着部をハクリする際に膿流出を認めた。組織学的には真性憩室の穿通によるものであり、壁はフィブロ・ヒアリネースに著明に肥厚していた。

20. 潰瘍性大腸炎、家族性大腸腺腫症に対する新しい自然肛門温存術式について

畠山 勝義・小山 真
下田 聡・井上雄一郎
山寺 陽一・酒井 靖夫(新潟大学第一外科)
須田 武保・山井 健介
鹿島 雄治・武藤 輝一

潰瘍性大腸炎や家族性大腸腺腫症は若年者に多く、永久的回腸人工肛門は出来るだけ避る傾向にあるが、直腸を残しての回腸直腸吻合術は残存直腸の炎症再発や将来の悪性化が問題となる。近年大腸全摘+直腸粘膜切除+回腸囊肛門吻合術が直腸粘膜も切除でき、自然肛門も温存できる術式として注目されている。今回私共はW ileal pouch-anal anastomosis を6症例に行ってみたのでその術式を紹介するとともに、5症例に直腸肛門内圧測定を行って機能を評価してみた。すなわち直腸肛門反射は全例とも消失しているものの、他は正常に近く、1日排便回数も術後2~3カ月で4~5回以下となり、ほぼ満足しうる結果を得ている。

21. 上行結腸癌に合併した原発性びまん性腸悪性リンパ腫の1例

岡本 春彦・須田 武保
酒井 靖夫・畠山 勝義(新潟大学第一外科)
小山 真・武藤 輝一
渡辺 英伸(同 第一病理)

症例は70才男性。主訴は下腹部痛。術前、血液所見、胸部X線像に異常は認めず、体表リンパ節、肝、脾は触知しなかった。注腸及び大腸内視鏡にて上行結腸癌と診断。開腹時所属リンパ節転移を認め、右半結腸切除術を施行した。切除標本で、上行結腸に2型進行癌及び2つの腺腫を認め、うち1つは腺腫内癌であった。他に終末回腸に粘膜ヒダの腫大と標本全体のリンパ濾胞増生がみられたが、組織学的検索では、悪性リンパ腫びまん性小細胞型の診断であった。郭清リンパ節も悪性リンパ腫の所見を呈し、癌転移は認められなかった。術後化学療法を行ったが、大腸内視鏡にて残存大腸全体にリンパ濾胞増生様所見があり、生検で悪性リンパ腫が証明された。化学療法を再開し、経過観察中である。